



津波で被災し、修復された陸前高田市の「吉田家文書」。気仙町今泉地区の特徴的な鍵型道路など、往事の町並みも記録に残されている

# 近景 遠景

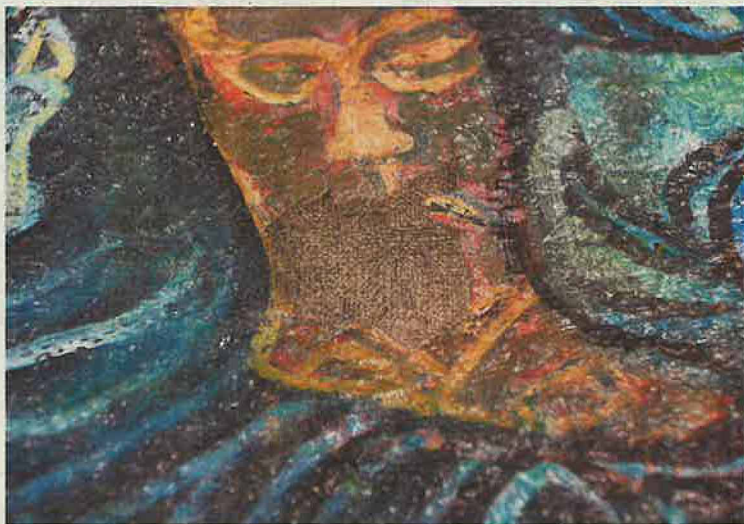
## 本県被災文化財レスキュー

安定化処理とは資料を劣化させる要因を取り除き、安定的に保管、展示できる状態にする。津波被災文化財では「除泥」「除菌」に加え、塩分を除去する「脱塩」が命題と言える。水に漬けること

「文化財レスキューには、全てにおいて『ファイナルアンサー』がない」  
こう話すのは、東京芸術大学大学院保存修復油画研究室の土屋裕子教授。「美術品として展示すること」を第一目標に、陸前高田市のアクリル画や油絵の安定化処理を手掛けている。

東日本大震災から9年余りが経過した今も続く被災文化財レスキュー。単に傷付いた文化財を修復するだけでなく、それぞれの地元で再び展示されるまでを見据えた地道な作業だ。各分野の専門家が「郷土の宝」をよみがえらせるため、試行錯誤を続けている。  
(文化部・佐藤瑛子)

## 「帰郷」の先見据えて



欠損部分を充填した油絵。通常は石こうとにかわで埋めるが、後のことを考えて水に強い素材を使った

が有効とされるが、一般的に文化財は水分厳禁。被災でもたらされた塩分の影響と脱塩処理のリスクの見極めが必要となる。

### ▽今できること

土屋さんは大画面のアクリル画に対してはろ紙や吸水シートで「湿布」する方法を考案したが、油絵に対しては積極的な脱塩処理を行っていない。同様の処置をすると表面に亀裂が入るためだ。判断の参考としたのが、岡山県の画家坂田一男(1889〜1956)の作品。44年と55年に高潮被害に遭い、現在も塩分が残留しているが影響はみら

れないとい、陸前高田市の油絵についてもあえて脱塩処理をしなくても良いと判断した。

「今できることは、修理して展示できるようにすること」と土屋さん。今後、水を使う処理が開発された時のことを考え、欠損部分の充填には水に耐えられる素材を使用。「ファイナルアンサー」を求めず、現状で可能な処置を施している。

国登録有形民俗文化財「陸前高田の漁撈用具」に含まれる装束など、1点ずつ繊維の状態を確認しながら洗浄・補修。被災後1カ月間水に漬かり、劣化が進んでしまった資料を地元でも安定的に保管できるように、処理を終えた資料それぞれに専用の箱や、包み紙である「たとう紙」を作る。繊細な染織品のため、導入したのがサクシジョンテープ。主に紙資料のクリーニン

ルを自作。洗浄後の染織品から少しでも早く水分を抜くために使っている。「海水を抜くため何度も水で洗っているが、水に漬けるほど繊維には良くない。少しでもぬれている時間を減らすため」。操作が簡単で経験がない人でも扱いやすく、岩手での使用も視野に入れる。

### ▽次のステップ

「私たちが関わる範囲は決まっている。次のステップが大事になっていく」と話すのは、東京国立博物館保存修復室の野中昭美研究員(八幡平市出身)。破壊され、正面しか残らなかった陸前高田市の

修復者の笈やバラバラに割れた算額などの修復に当たる。どちらもほぼ原形をどめたいが、同市立博物館の意向でできるだけ当初の形に復元することにした。野中さんは「どこまでの記憶をこの資料に含ませたいか。被災した状況だけでなく、陸前高田の歴史を伝える博物館を復興していくということ」と説明する。

レスキューされた資料はいずれ地元に戻る。「あとは現地の方がこれにどう目を向けて、考えていくかが大事」。預かった文化財が再び岩手に戻り、人々の日常に受け入れられる日を見据える。



修復を終えた染織品。極力繊維を傷めないよう、1点ずつ専用の箱とたとう紙を作っている

レスキュー事業でよみがえった文化財は、被災した地域にあってその重要性を増している。古文書や絵図、民具、生物標本など、どれも三陸の豊かな文化の証となるものばかりだ。

東海大文学部の兼平賢治准教授(盛岡市出身)は被災文書の調査に携わる。これまでに陸前高田市の吉田家文書や大槌町の前川家文書、宮古市の盛合家文書などから、近世三陸の暮らしをひもといてきた。

本県文化財レスキューの象徴的存在となった吉田家文書は、仙台藩領だった気仙郡の大肝入を世襲した吉田家に伝わる文書類。当主の執務記録「定留」95冊が津波で失われることなく残り、国立国会図書館が中心となって修復した。

領民の暮らしや産業、幕府の命による蝦夷地警備、盛岡藩で起こった三閉伊一揆の越

## 活用してこそ真の復興

訴など多岐にわたる記録が残る。兼平さんは「決して気仙のことだけの記録ではない。これからもっと藩を越えて理解が深まっていくと指摘する。」  
前川家文書、盛合家文書は盛岡藩領だった吉里吉里(大槌町)、津軽石(宮古市)を拠点に財をなした豪商の家に伝わる文書類。前川家文書は約4700点が水産庁によって買い上げられていたが、同町吉里吉里の前川家が木箱に収めて保管していた約千点が被災し、修復された。

水産庁が購入した資料は前川家の経営に関する資料が中心。家伝や系図など、家の歴史に関するものは地元に残され、レスキュー事業を経てその価値が見直された。例えば祝儀帳やお悔やみ帳からは前川家をめぐるつながりが分かる。藩主との関わりや、宝暦の飢饉にまつわる記録もあった。

盛合家文書は、被災した国学院大の石垣悟准教授は「救出、目に見える汚れの除去、安定化処理に続くレスキューの4段階目として、情報の復元が必要」と説く。「保管、保存と展示に加え、活用部分も復元していかないと博物館としては前に進めない」。物理的な修復だけでなく、資料の来歴なども復元してこそ博物館資料の復興と言えるというのだ。

石垣さんは昨年度から、地域住民への聞き取り調査を進めている。被災現場からの救出、応急処置、安定化処理と修復、そして再び展示資料として活用するための調査。地道に、しかし着実に。「郷土の宝」をよみがえらせるための取り組みはこれからも続く。

「近景遠景」は、芸術文化に関する話題や課題を、テーマごとに詳しく報じます。第2土曜日に掲載します。